

令和2年度（2020年度）実施報告書（総説：鳥谷智文）

本年度は、「島根半島・宍道湖中海ジオパーク地域の歴史的景観と人々の生業、生活、文化に関する研究」と題して、鳥谷智文、杉谷真理子、矢野千紘の3名により、昨年度に引き続き古代～現代にかけての史料の分析を行ってきた。本年度の進捗状況は、コロナ禍の影響もあって、スムーズに進んだとは言い難い状況であった。本年度は、直接集まったの研究会は避け、外部のオンラインでの学会に焦点をあて、活動した。また、昨年度の報告成果を活字にすることに努力を払った。

よって、本年度は、研究活動が制限された中で、フィールドワークなどにより新たな材料を発見し、分析、紹介する活動は制限され、既存の研究材料、インターネットで得られる情報を分析、紹介する方向を模索することとなった。この際、インターネットで得られた情報は、情報源の問題も含め、吟味は慎重に行った。

時代順にその研究状況を見てみると、古代においては、矢野が軻の形状と瀧湖地形との関連について、先行研究をもとに調査を深めるとともに、同時代の他の文献史料等に残る軻の記事について分析している。

近世・近代を担当する鳥谷は、前年度に報告した松江町人乃木綿屋・松江綿屋の分析を論文にし、公表することとした。また、乃木村の製紙を中心とした手工業産業の実態について、史料翻刻及び分析に着手した。

現代においては、杉谷が歴史的景観に区分したもののうち観光の利便性に優れ、特に現在に至るまで人々の生活とのかかわりが深いと考えられる「玉造温泉」、「松江城とその石垣」の2つのジオサイトを対象として景観の特徴を捉えている。

研究状況の詳細は、以下に記載されている各人の実施報告書を閲覧していただきたい。コロナ禍の中で、当初の研究計画にあった聞き取り調査など地域の人々と密接に関わる活動などはできなかった。また、内部研究会も開催が叶わなかった。その中で、今回は研究代表者を中心に、オンライン研究会などでの報告、そして、オンライン配信など新たな発信体制の模索を行った。

本年度の研究業績についても下記の各人による報告に記載している。但し、業績については、ジオパークに関連するものだけでなく、もっと大きな範囲での研究業績も含め記載している。また、業績には、従来記載していなかったが、インターネットを利用したオンライン配信についても記載した。参考にしていただければ幸いである。

1. 研究進捗状況

昨年度は、『出雲国風土記』秋鹿郡恵曇郷（現：松江市鹿島町）に載る恵曇の郷名の由来について、文献史料学、考古学の観点から調査・検討した結果、鞆（古代の弓矢の付属具。革製で中をふくらませて縫い合わせ、左の手首の内側に紐で結びつけ、射離した弓の弦を受けるためとする。（国史大事典））に見立てられた恵曇の国形が、先行研究（関、2006）によって比定されていた恵曇の湾曲した海岸線ではなく、恵曇の浜の内陸部にあり、かつては潟湖（海に近接または連続した水塊が、砂州などの低くて狭長な土地によって海と部分的または全体的に隔てられたもの（『新版地学事典』地学団体研究会、平凡社、1996））を抱えていた恵曇の陂（現：鹿島町佐陀本郷に比定）の円形の形状を指している可能性について指摘することができた。

今年度は鞆の形状と潟湖地形との関連について、先行研究をもとに調査を深めるとともに、同時代の他の文献史料等に残る鞆の記事について分析した。それらを踏まえて、古代における鞆の描かれ方や古代人の生活との関わりについて考察し、古代出雲の人々の生活風景を浮かび上がらせたい。

日本海沿岸の潟に関する先行研究（森、1985ほか）から日本海沿岸の潟の特徴を抽出すると、日本海側の潟は奥行きがあり、円形か楕円形が多いことで停泊させられる船の数も多かったために潟港として栄えたほか、潟港の所在地は潟へ注ぐ川を利用した陸上交通の拠点にもなり、商業活動が盛んだったことなどが注目される。円形や楕円形という形状は鞆の円形の形状に通じ、水陸両方の交通の発達から商業活動が盛んとなったことから、玉生産や大陸との交流によって栄えた古代出雲の発展の背景がうかがえる。また古代文献史料における鞆の記事をみると、『日本書紀』持統天皇七年（693）に載る武器検閲の記事や、天平12年（740）『越前国江沼郡山背郷計帳』（正倉院文書）に記載された兵士の佩物として鞆が登場し、少なくともこの頃までは鞆が純粹の武具として実際に装備されていたことがわかる。その後は公家の弓矢の行事における儀仗として形式化していき、『四季草』によると、貞治の頃には既に鞆をつけて弓を射ることを知る人が少なくなってきたようである、とある。『延喜式』兵庫寮には、鞆料として熊や牛の革が用いられたとしてその詳細を伝えているほか、『日本古義』には鞆の製法と着用法として、儀仗として複雑化された紐の結び方の図解が載る。『万葉集』ではもっぱら、弓弦が鞆にあたった時の音、「鞆の音」、「鞆音」として歌われるか、あるいは鞆の浦の地名としても詠まれていて、地名としての鞆も、恵曇と並んで古代からすでに存在していたことが確かめられる。また、鞆は武装する女神の象徴としても語られており、『古事記』『日本書紀』ともにアマテラスが武装した際に鞆を身につけていたと伝えているほか、『日本書紀』と『肥前国風土記』（松浦郡）には新羅に出征する神功皇后も鞆を身につけて武装したとする記事がある。希少ではあるが、鞆型埴輪が出土している点からも、鞆が、由来古く、古代から人々の生活や信仰、神話と深く結びついていたことがうかがえる。

また、恵曇をはじめ、鞆がつく地名には潟湖や入江が多いことも注目される。

* 潟湖、入江＝恵曇（絵鞆）、恵曇陂（島根県鹿島町）、鞆ヶ浦（島根県大田市）、鞆の浦（広島県福井市）、鞆（登望）駅（佐賀県呼子市）、鞆結（高島市。鞆結神

社がある浦に比定する説がある)

なお、鞆のつく地名には荘園の跡地も多いが、これは田租を納入する際に船が用いられ、荘園から港までの交通確保は非常に重要であったことと無関係ではないのではないかと推察される。

◎荘園＝鞆渚（和歌山県紀の川市）、鞆岡（京都府長岡京市）、鞆田（三重県伊賀市）、鞆呂岐（大阪府寝屋川市）、鞆張（広島県世羅郡）

以上のことから、天然の良港で、船を安全に停泊させられる鞆型の潟港は、豊漁と航海の安全を祈る古代人にとっては信仰の対象となる、聖なる場所であったことが推察される。今回調査した鞆と潟湖地形との関わりについては、名前に鞆を有する『古事記』の応神天皇（大鞆和気命）の易名説話と関連させて「応神天皇の「易名」 — 「鞆」との関わりをめぐって一」と題して「令和2年度 古事記学会 11月例会」において報告した。

宍道湖・中海は『出雲国風土記』に「入海」と記され、神西湖は「神門水海」とみえる。ほかにも日本海側には森（1991）が指摘するように海へ通じる多くの湖があり、恵曇港同様古代出雲の人々に物質的にも精神的にも豊かな恵みをもたらしてきたのだろう。今後はこれらの潟湖についても史料、考古の両面から調査を行い、鞆のほかに潟湖の名残を今に伝える地名やキーワードを発掘し、ジオパーク運営の一助としたい。

参考文献：

1. 関和彦『出雲国風土記註論』明石書店、2006
2. 森浩一「古代日本海文化と仮称“潟港”の役割」『古代日本海文化の源流と発達』大和書房、1985、「日本海西地域の古代像」『海と列島文化2 日本海と出雲世界』小学館、1991、「古代日本海文化と潟港」『海・潟・日本人 日本海文明交流圏』講談社、1993、「潟と港を発掘する」『日本の古代3 海をこえての交流』中央公論社、1995 ほか

2. 業績

○学会発表・講演等：

- ・矢野千紘：応神天皇天応の易名 — 「鞆」との関わりをめぐって一、古事記学会 11月例会（オンライン）、2020. 11. 28

1. 研究進捗状況

昨年度、城下町松江に拠点をおき活動した灘町の松江綿屋忠四郎（後に魚町へ移動）、堅町にあった乃木綿屋（後に乃木へ移動）について、その活動、田部長右衛門家との関係などについて報告したが、その内容を再度吟味、加筆し、「幕末～明治初年における松江の町人—乃木綿屋、松江綿屋の事例紹介—」と題して、『松江市史研究』12号に掲載されることが決定し、世に問うこととなった。2021年2月に発刊の予定である。

また、乃木公民館で発見した旧乃木村役場文書を閲覧できる機会を得ることができ、現在、史料整理、文書目録作成に従事しているが、その中で、第3回・第4回内国勸業博覧会関係史料があり、明治初期～中期において、内国勸業博覧会に出品した生産物についての記載があった。史料には、米は勿論のこと、乃白（野白）を中心として近世から生産し続けていた和紙、そして玉湯で有名である瑠璃細工などが、名産品として出品されていたことがわかり、その生産に関わる職人、生産量、生産額など、乃木村を支えたであろう産業構造の一端が見えてくるものと考えている。当時は、和紙生産が盛んであり、近世から紙漉を行っている中條家をはじめとして、高島家、福間家、目次家など多くの紙漉職人が記載されている。また、生産した紙も、蚕種原紙、天具状、小奉書、美濃紙、中折紙、詩撰紙、五色縮紙、美濃紙、雁皮紙、藁紙半紙、コッヒー紙など多種に及んでいる。また、瑠璃細工については、洋服を着る機会が多くなったことを背景として、ボタンの需用が高まり、瑠璃によるボタン製作が盛んに行われたようである。

このような手工業生産の状況を、「第3回・第4回内国勸業博覧会関係史料からみた乃木村の産物」と題して、島根史学会オンライン研究会で報告する。

このように、松江市域内の乃木地域をみても、歴史に根差した産業が明治中期には発達していたことがわかる。この産業が斜陽化し、産業が転換していくのは恐らく大正期であろうが、この点については、今後研究していくべき問題と考えている。

2. 業績

○論文・研究ノート・講演論文等：

- ・鳥谷智文：明治前期絲原家のたたら製鉄と生産品、日本技術史教育学会研究発表講演論文集、pp. 5-8. 2020. 11
- ・鳥谷智文：明治10年代後半における精錬法の改良—送風動力装置の導入—、鉄の技術と歴史研究フォーラム第25回公開研究発表会論文集、pp. 9-16、2020. 12
- ・鳥谷智文：幕末～明治初年における松江の町人—乃木綿屋、松江綿屋の事例紹介—松江市史研究12号、2021. 2（刊行予定）
- ・鳥谷智文：たたら製鉄業経営者櫻井家のもとで働く人々—手代・職人などの褒章事例の分析を中心に—、史人第8号、pp. 63-75、2020. 12
- ・鳥谷智文：八重滝鉦における水力送風技術の導入、菅谷たたら山内総合文化調査報告書2、鉄の歴史村地域振興事業団、2021. 3（刊行予定）
- ・鳥谷智文：19世紀におけるたたら製鉄により製作された刀の原材料「極上鋼」に関わる費用と日本刀の価値、日本技術史教育学会関西支部2020年度研究発表講演会講演論文集、

2021.3 (刊行予定)

○学会発表・講演等：

- ・鳥谷智文：19世紀後半における山間部の新田開発 ―「仁多郡上三成村芋ヶ畑まさかり淵」と「飯石郡吉田村高ノ巣」の事例紹介―、島根地理学会例会、島根大学（オンライン）、2020.7.23
- ・鳥谷智文：明治前期における絲原家たたら製鉄と経営動向について、第1回中国地方たたら懇話会、(公財) 絲原記念館、2020.9.20
- ・鳥谷智文：五人組規約・矯風規約にみえる人々の暮らし、鉄の歴史フォーラム 2020、島根県産業技術センター（オンライン）、2020.9.27
- ・鳥谷智文：石見東小学校の郷土調査資料からわかる年中行事、にちなん町民大学、日南町総合文化センター2階多目的研修室、2020.10.8
- ・鳥谷智文：明治前期絲原家のたたら製鉄と生産品、日本技術史教育学会 2020年度全国大会、松江工業高等専門学校図書館（オンライン）、2020.11.14
- ・鳥谷智文：明治前期における鉄師絲原家の経営動向 ―明治9年(1876)「議事日誌」(絲原家文書)を題材にして―、社会経済史学会中国四国部会 2020年度高知大会、高知市立自由民権記念館（オンライン）、2020.11.28
- ・鳥谷智文：明治10年代後半における精錬法の改良 ―送風動力装置の導入―、鉄の技術と歴史研究フォーラム第25回公開研究発表会（オンライン）、2020年12月12日
- ・鳥谷智文：たたらを学ぶ②近世・近代のたたら、第3回ヘリテージツーリズムマネージャー養成講座、雲南市役所301会議室、2020.12.25
- ・鳥谷智文：出雲のたたら製鉄と北前船～廻船が運んだモノ～、中日文化センター 6県リレー講座（オンライン）、2021.2.19（予定）
- ・鳥谷智文：第3回・第4回内国勸業博覧会関係史料からみた乃木村の産物、島根史学会オンライン研究会、2021.2.27（予定）
- ・鳥谷智文：地域のメッセージを発信する博物館を訪ねて、第3回中国地方たたら懇話会、(公財) 絲原記念館、2021.3.13（予定）
- ・鳥谷智文：島根県における産業・技術の歴史、第19回松江工業高等専門学校実践教育支援センター職員研修会、松江工業高等専門学校、2021.3.23（予定）
- ・19世紀におけるたたら製鉄により製作された刀の原材料「極上鋼」に関わる費用と日本刀の価値、日本技術史教育学会関西支部 2020年度研究発表講演会（オンライン）、2021.3.27（予定）

○その他：

- ・鳥谷智文：日本技術史教育学会 2020年度全国大会（島根・松江）開催にあたって、技術史教育第124号（ニュースレター）、日本技術史教育学会、2020.10.31
- ・鳥谷智文：日本技術史教育学会 2020年度全国大会（島根・松江）報告、技術史教育第125号、日本技術史教育学会（ニュースレター）、2021.1
- ・新聞記事：鉄職人たちの暮らし探る、山陰中央新報、2020年（令和2年）9月28日記事
- ・Youtube 配信：前掲鉄の歴史フォーラム 2020、2020.9.27
- ・テレビ放映：前掲鉄の歴史フォーラム 2020、雲南夢ネット放映、2021.2.15、18:00～、22:00～

2021. 2. 16、10:00～、15:00～

- ・幕末期における町のようすー若槻屋文書からー、鉄の歴史博物館オンライン企画展（鉄の歴史博物館）、2021. 3. 1～（配信予定）
- ・吉田町の歴史探訪、鉄の歴史博物館オンライン企画展（グリーンシャワーの森・吉田町）、2021. 3. 15（配信予定）
- ・吉田町衆と小鍛冶座、鉄の歴史博物館オンライン企画展（上代鍛冶屋）、2021. 3. 29～（配信予定）

3. 学会表彰など

- ・日本技術史教育学会優秀論文講演賞、2020. 11. 14
- ・日本技術史教育学会創立 25 周年記念特別表彰、2020. 11. 14

令和2年度（2020年度）実施報告書（各論：杉谷真理子分）

1. 研究進捗状況

昨年度は島根半島・宍道湖中海ジオパークのウェブサイトの分析を行い、ウェブサイト活用の側面より本ジオパークへの提言を行った。本年度は昨年度の研究会にて着手していた、ジオパーク内のジオサイトに関して考察を行うとともに、本ジオパークの活用的一端を担う観光（ジオツーリズム）について、県外居住者との関係について統計データをもとに今後の研究の道筋を検討した。

まず、本ジオパークのジオサイトについて、景観の特徴と観光の利便性により次のような分類を行っていた（表1）。

表1

通し番号	名称	自然	歴史的	(生活の場)	アクセス性
1	鷺浦の縦穴海食洞	○			
2	茶臼山		○		
3	日吉の切り通しと旧蛇行河道	○		○	
4	花仙山のメノウ脈	○	○		
5	玉造温泉	○	○	○	○
6	来待石の石切場	○	○		
7	鞍掛岩	○			
8	岩根寺のデイサイト節理	○			
9	立久恵峡	○			
10	八雲風穴	○			
11	鬼の腰掛岩	○			
12	小田海岸の貝化石	○			
13	大根島の湧水	○			
14	大根島の溶岩トンネル	○			
15	大根島のスコリア丘	○			
16	嵩山と和久羅山	○			
17	嫁ヶ島	○			
18	松江城とその石垣		○	○	○
19	松江層の潮汐堆積層	○			
20	津ノ森の弥生時代のシジミ	○			
21	湯の川温泉	○	○		
22	斐伊川	○	○	○	
23	神戸川	○			
24	浜山砂丘	○	○		
25	稲佐の浜	○	○		
26	蘭の長浜	○			
27	差海川河口の古砂丘	○			
28	沖の御前	○	○		
29	地蔵崎	○			
30	美保関の男神・女神	○			
31	青石畳通りと森山石		○	○	
32	美保関の海食崖	○			
33	法田海岸の波食棚	○			
34	宇井の古浦層	○			
35	惣津海岸と明島	○			
36	権現山河窟	○		○	
37	入道磯	○			
38	千酌海岸の波食棚	○			
39	美保関隕石	○			
40	美保関古浦ヶ鼻の鉱物	○			
41	笠浦海岸のいろいろな火砕岩	○			
42	瀬崎のヒョウタン池	○			
43	瀬崎のドンド穴	○			
44	瀬崎の崩落火道	○			
45	築島の岩脈	○			
46	多古の七つ穴	○			○
47	佐波海岸の海底火山	○			
48	多古の石柱	○			
49	加賀の潜戸	○			○
50	桂島	○			○
51	須々海海岸の洗濯岩	○			
52	大ぞ島の車石	○			
53	古浦海岸の貝化石	○		○	
54	赤浦海岸	○		○	
55	立石の巨石	○		○	
56	大船山	○			
57	小伊津海岸の洗濯岩	○			
58	唯浦の直立層	○			
59	久多見石	○		○	
60	十六島鼻の海食崖	○			
61	猪目洞窟	○			
62	韓龜神社周辺の黒鉱鉱床	○		○	
63	弥山のごえんゴウロ	○			
64	大社湾岸	○			
65	大社断層の巨大な擦痕	○			
66	日御碕	○			○
67	礫島	○			

ジオサイトをジオパークウェブサイトの記載事項によって「自然景観（自然）」、「人間との関わりをもつ歴史的景観（歴史的）」に区分し、「公共交通機関等での移動経路が明白であるかどうか（アクセス性）」判別したものである。加えて、「歴史的」なものとしては、「人々

の生活との関係性が深いもの（生活の場）」に注目して細分化した。今年度は、歴史的景観に区分したもののうち観光の利便性に優れ、特に現在に至るまで人々の生活とのかかわりが深いと考えられる「玉造温泉」、「松江城とその石垣」の2つのジオサイトを対象として景観の特徴を捉えた。なお、分析は目視で行い、マンセル表色系を使用した。

「玉造温泉」：古来より温泉地として発展しており、近隣でメノウが産出することより温泉街のモチーフとして勾玉を使用している。玉湯川の両岸に旅館などが立ち並ぶ。メインの温泉街となる湯町八川往還を、山陰自動車道から島根県道 25 号玉湯吾妻山線までとして、景観の特徴を色彩の面から捉えると次のようになる。①旅館・商店等の商業施設によって構成されている。建築物の多くが高明度・低彩度の R、YR、Y と調和のとれた配色となっている。黒系の瓦を使用しているケースが目立つ。通りに面しているものばかりではなく、セットバックしている場合は手前に石垣（無彩色や高明度・低彩度の YR や R）や生け垣（YR や G）が配置されている。②部分的に木目調（低明度・低彩度の R、YR）の建築物や構造物がみられる。③一部に高彩度の屋根等がみられ、周囲の色彩と調和していない。

「松江城とその生垣」：松江城を囲んでいる堀より内側を対象として考察した。①天守をはじめとして建築物は白と板張となっている低明度・低彩度 R もしくは黒を組み合わせた配色となっている。屋根は黒系の瓦を使用しており、全体的に建築物の色彩は統一されている。②洋館である興雲閣（外壁は白、屋根部は黒系瓦）は建築様式的にも異なり際立つ存在となっている。③植栽としては、常緑樹である松が多く用いられている。一方で、桜等の落葉広葉は時期により色彩が異なり、松江城の四季を感じさせる重要な要素として捉えることができる。

この2つのジオサイトは上述したように、景観に色彩的な特徴を持っているといえる。この景観の色彩は、固有の風土の色として地元住民や訪問者の印象に残りやすいと考えられる。また、上記のジオサイトは観光時の利便性が高く現時点で観光地として認識されているという点からも、よりこの地域のイメージとして定着が進んでいる（いく）ものとも考えられる。一方、山間部や沿岸地域のジオサイトは立地的にアクセスしづらいこともあり、地元住民や県外居住者に広く認識されているとは言い難い。これらのジオサイトがどの程度認知され興味を持たれているかは、今後詳しい調査を必要とするが、既存の調査より類推しておきたい。島根県商工労働部観光振興が首都圏居住者に対して実施している、「令和2年度しまねの観光認知度調査報告書（第1回調査）」では、以下のような結果が得られているため、参考のため一部を抜粋した。

①設問4 島根県に関して以下の事柄をご存知ですか。ご存知のものをお答えください。（回答はいくつでも）

→「隠岐諸島と周辺海域は、隠岐ユネスコ世界ジオパークに認定されている」が9%であり、関東圏では本ジオパーク自体が認識されていない可能性が高い。

②設問23（あなたは、今後、島根県へ旅行に行ってみたいと思いますかという設問に対して）「とても行ってみたい」「やや行ってみたい」「どちらでもない」と答えた方にお伺いします。島根県のどこへ行ってみたいと思いますか。（回答はいくつでも）

→この設問に対して、宍道湖と隠岐諸島を除き自然環境への指向性は高くはないことがうかがえる。

③設問 24 (あなたは、今後、島根県へ旅行に行ってみたいと思いますかという設問に対して)「あまり行ってみたいと思わない」もしくは「まったく行ってみたいと思わない」と回答した理由について、あてはまるものをお答えください。(回答はいくつでも)

→「何があるのかよくわからない」34.1%、「島根県は遠く時間がかかる、アクセスが悪い」30.1%という結果は、回答者が首都圏居住者という島根県とは地理的・心理的に距離があるということを考慮しても、やはり今後ジオツーリズムを含む観光化を進めていくなか、さらなるPRが必要であることを示している。

参考文献等：

1. 令和2年度しまねの観光認知度調査報告書 (第1回調査)

<https://www.pref.shimane.lg.jp/tourism/tourist/kankou/chosa/ninchido.data/ninchido2020-1.pdf>

2. 業績

なし